

---

## 【巻頭言】

# 健康づくり（プラス）環境保全

種田 行男<sup>1)</sup>

1) 中京大学生命システム工学部

---

2005年日本国際博覧会「愛・地球博」が、120以上の国や地域および国際機関の参加と協力を得て、愛知県で開催されました。日本での開催は35年ぶりですが、その内容は大量生産・大量消費時代の大阪万博とは大きく異なり、21世紀最初の万博は「自然の叡智」をテーマに環境・食糧・エネルギーなどの社会問題を地球規模の観点から考える場となりました。

最近、「ロハス」という言葉をときどき耳にします。ロハスとは英語の *Lifestyles Of Health And Sustainability* の頭文字をとったもので、健康と環境維持に高い関心を持った生活様式のことを意味します。地球環境問題への関心が高まった20世紀末期にアメリカの社会学者が新しい流れをとらえて、提唱したのが始まりのようです。

そう言えば、愛・地球博では「エコマネー（事業）」なるものが登場しました。この事業は、「環境保全活動」と「ボランティア活動」を新たな通貨価値で評価し、博覧会を利用して参加・交流型のエコ・ムーブメントを創造しようとするのが目的でした。具体的には、環境にやさしい行動（エコ活動）を行うとエコマネー事業と連携しているサポーター（企業/団体）からエコ活動を証明するポイントや参加証がもらえます。貯まったポイントはエコマネーに両替されてそれを自分のため（エコ商品との交換）に、あるいは地球のため（植樹に寄付）に使うことができます。代表的なエコ活動としては、レジ袋をもらわないという活動があります。この活動はレジ袋1枚を生産するために約100gのCO<sub>2</sub>が排出されると計算されることから、レジ袋を使用しなければその分のCO<sub>2</sub>排出を削減できるという理屈です。万博期間中、エコ活動には596,121名の一般市民が参加し、万博終了後の現在でもこの事業は名古屋地区で継続されています。この結果からみれば、事業目的であるエコ・ムーブメントの創造は一応成功したと言えるでしょう。

このようなエコ活動は、まさにロハス的活動と言えます。無理をしないで、自然と調和して暮らすことは何も新しいことではなく、昔から行われてきたことでした。しかし、現代人が実施するには「無理なく」、「おしゃれに」、「楽しみながら」といった味付けが必要なようです。このような考え方や手法を健康づくり活動にも利用できないでしょうか。健康づくり活動の実施には、やはり本人の健康に対する意識・信念・態度などが重要な要素です。そのときに、実施した保健行動がただ単に自分の健康のためになるだけでなく、地球環境の保全にも役立つとしたら、個人の満足度や行動意欲は更に高くなるかもしれません。

ロハスな思考は現代の日本人の価値観によくマッチしているように思われます。このような活動をきっかけにして、より多くの人々がより長く保健行動を継続するようになれば、いまだ数少ないポピュレーションストラテジーによる健康づくり事業のひとつの事例になることでしょうか。私事ですが、ロハスに限らずヘルス・ムーブメントを起こすための仕組み（システム）や小道具（ソフトとハード）づくりに、研究や教育を通じて寄与できればと思います。